



図／自然エネルギーをシェアする場のイラスト  
自然エネルギーを電気に変換し、蓄電した電池が設置されている憩いの場。子どもを公園で遊ばせながら会話を楽しみ、涼むことができ、ついでに携帯電話の充電もできる。

# 高齢者に教わる 低環境負荷なまちづくり

古川 柳蔵 ◎ 文  
text by Ryuzo Furukawa

## 失われてある自然と 共に生きるための知恵や考え方

私たちはかつて、自然を活かしながら、自然と共に生活していました。食物を自分で育て、燃料は山の木々を切つて薪にしています。庭には実がなる木を植えて、おやつに柿を食べ、保存食にして冬を越していました。ものを大事に手入れして、長く使うのは常識でした。食物の残りは、畑の肥料にしました。自然から与えられたものを隅から隅まで利用する生活をしてきたのです。これから一つ一つの行動には、ご先祖様の知恵が詰まっています。まさに、自然環境を破壊せず、自然と共存する暮らし方なのです。

私たちは、今まで、便利な世の中を手に入れると同時に、知らず知らずのうちに、これらの知恵や考え方を失いつつあります。同時に、限られた自然環境の中で心豊かに暮らす方法を忘れ去ろうとしています。これらの知恵や考え方を子孫へと受け継ぐしくみもありません。

これらの貴重な知恵や考え方を記憶し、経験してきたのが、現在九十歳代の人々です。しかし、この知恵は年月を経ると共に消え去ってしまうの言うまでもありません。今すぐにも、日本各地の九十歳の人々から昔の暮らしの話を聞いて、学ばなければ、数年もすれば次々に失われていくでしょう。

## 九十歳に学ぶライフスタイル

東北大学大学院環境科学研究所の私たちの研究グループはNPO法人サステナブルソリューションズと協力して、二〇一〇年頃か

ら、自然環境に負荷を与えない戦前の暮らし方を明らかにするために、宮城県在住の九十歳前後の高齢者六十五名以上に対して、聞き取り調査を行いました。現在は、秋田、高知、広島といった国内、さらに米国・ロサンゼルスなど海外にまで幅を広げています。これを「九十歳ヒアリング」と呼んでいます。

今の九十歳は、戦前に二十歳ぐらい、今のエネルギー消費量の半分であった一九六〇年ごろに四十歳になっている人々です。エネルギーや資源を多く消費しない社会において、一家の大黒柱として、生計を立てていた人々です。この九十歳の人々に聞き取り調査を行うということ、地道ではありますが継続し、さまざまな知恵や考え方を収集してきました。

## 九十歳に学ぶまちづくりが始動

戦前の暮らしでは、「自然のリズムに合わせる心地」を楽しんでいたことがわかりました。心地良いそよ風の吹く涼み台に人々が集まっていたのです。そして、そこに集う人々は燃料や薪を共有し、助け合いながら生活をしてきました。このように化石燃料を使わずに、大事な資源を無駄に使わないこと、家の中でエアコンなど家電製品を使わないで、しかもコミュニティの絆が強く、心豊かに暮らせる方法がどのようなものかを明らかにし、これらの知恵やしくみを現代社会に応用したいと考えています。

例えば、このように絆の強いコミュニティを再び取り戻すために、宮城県仙台市宮城野区では、自然エネルギーを電気エネルギーに



写真／九十歳ヒアリングの様子

変換し、その近所の人々の間で昔の燃料のように共有し、自由にその電気を利用できる場をつくることで、コミュニティを強化できるかを実験する取り組みが行われています。戦前の知恵から学び、将来の新しいまちづくりをしていこうという試みです。

その他、秋田市スマートシティプロジェクトにおいても九十歳ヒアリングが実施され、将来のまちづくりに活かされようとしています。鹿児島県阿久根市、兵庫県豊岡市、富山県南砺市など自治体が積極的に関わりながら、地域らしさと共に、自然と共生する知恵と技術を継承しようとしているのです。これがスマートシティと呼ぶべき町なのです。



古川 柳蔵(ふるかわ りゅうぞう)  
1972年生まれ  
現職／東北大学大学院  
環境科学研究所 准教授  
専門／環境科学、環境イノベーション  
関連ホームページ/  
<http://www.90solution.jp/>